

## アーティストトーク 03

# 「小川さん!これから どうしていきましょう!!」

2019年2月2日 14:00 - 15:30

ゲスト

小川 希 (Art Center Ongoing 代表)

## 人間が面白かったから、 作品も絶対面白い

小川 Art Center Ongoing (以下、Ongoing) は吉祥寺の一軒家を改装し、一階がカフェで二階はギャラリーとなっていて、いろいろな作家のポートフォリオや、画集が読めるようなライブラリーもあります。一定期間滞在して、制作するというレジデンスプログラムも行っています。2013年にレジデンスを始めたばかりの頃に、飯川君が黄金町でバイトをしていて。その時は、彼の作品を全く見たことがなかったけど、喋って見たら面白いなあと。僕は、作品と作家はセットと考えているんです。飯川君の場合は作品より人間が先で、人間が面白かったから、作品も絶対面白いと思って、「レジデンス始めるから来ない?」と声をかけたのが始まりですね。僕が作家を選ぶ基準としては、他の場所で発表できるような作家はあんまり選ばない。パフォーマンス、インスタレーション、映像作品とか、いわゆる物として売り買いしにくいような制作をしている作家ですね。あまり日の目を浴びてないけど面白いことやっていて、もしかしたら、いつか有名になるかもしれない人たちが集まっています。11年経ったけど、まだ誰も有名に……

**飯川** 有名人3人くらい出てると思います!

小川 Ongoing に集まる作家たちは、純粋に面白い作品とは何か、新しいことは何かといった、自分たちが今まで考えているアートを更新していくことに興味を持っている。もう少しアート自体にフォーカスしたいと、かっこよく言えばね。Ongoing は、基本的にはカフェの売り上げで回している場所で、年間200万くらい赤字です。それでアートプロジェクトのディレクターをしたり、大学や一般向けのアートの授業をしたりして、そのお金を全てつぎ込んでなんとか運営しています。だから、何にお金にはならないけど、そういう場所だからこそ、集まってくるっていうか。むしろ東京にいる数百人の作家が、ビールを一杯頼んでくれることで支えてもらっている場所です。

**飯川** アートセンターは市民の交流や発表の場としての役割を汲んでいるけど、Ongoing は、アートセンターという名前だけけど、実はアーティストのためで、一般の人なんてほとんど来ないですね。本当に、アーティストだけがぐんぐん集まるところで、当時はこれがどれだけ貴重で、大事なことなのかわかっていなかった。その時に、《デコレータークラブ》というプロジェクトについてどう展開していくかに悩んでいて、小川さんに話を聞いて欲しいんですけどって相談していました。

小川 飯川君は真面目だから、作品を説明する

火災受信所





DECORATORCRAB -Impulse and things around-  
2013  
50 photographic Paper boxes, 270 cm x 400 cm  
Installation view: DECORATORCRAB, Art Center Ongoing, Tokyo, 2013

レゼン資料みたいなのを作って、スライドも作っていたのに、全部噛み締めて読んでも、全然意味わかんなかった（笑）。

## 可愛く撮れないし 思ったより写らない

**小川** これが Ongoing でやってくれた時の記録ですけど（p.56）、ぱっと見、かっこよく見えるけれど、なにこれ？って感じなのね。

**飯川** これは、今回の展覧会の《デコレータークラブ》というタイトルにもなっている初期作品です。ある場所で、面白いものを見たり感動した時に、その感動した対象とか、主題になるものを撮らずに、あえて、地面や草や木といった周辺の物を撮るというシリーズです。デコレータークラブ

ていうのは、擬態する蟹のことなのですが、蟹自体がいろんな情報を背負っていて、それをそのまま模した感じです。中身は見えないというか、蟹には見えないけど、その場所の、その土地の情報の塊っていう設定で作りました。これは吉祥寺の Ongoing の近くにある造園屋さんの荷物置き場の土地にあったものたちが写っています。《デコレータークラブ》は 2007 年から始め、最初は写真と印刷物、WEB サイトで展示を行い、大量の周縁の写真から面白い主題にたどり着けるというものでした（pp.48-49）。写真にはいろいろな情報が詰まっているし、シンプルなのは場所や色、形が写っているので、もしかしたら被写体を頼りに行き着くことができるかもしれない。僕にとって写真とは、指標とか住所のようなイメージです。ただ、同じコンセプトでも様々な展開ができるの



**Next Fire**  
2016  
Single channel video 7 min

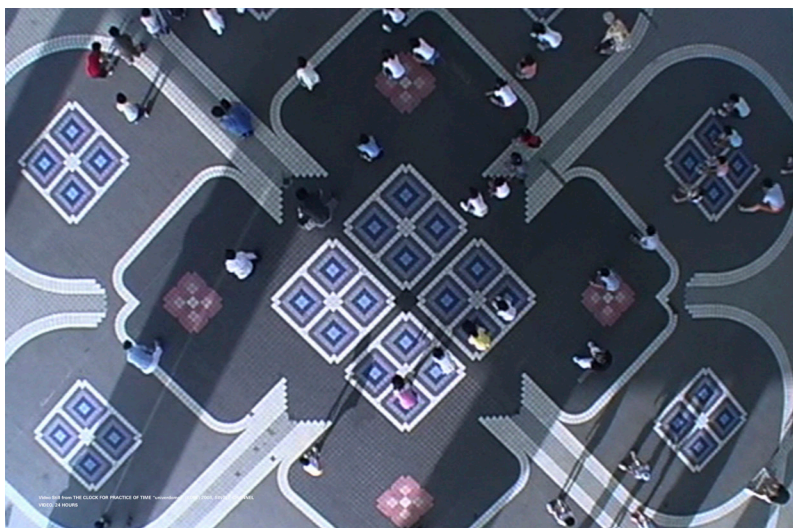
ではないかと思いました。最初は伝わらなくても、少しずつ伝わっていけばいいなと思って展覧会タイトルに『デコレータークラブ』の冠をつけて、今も実践しているところです。

**小川** 造園屋さん自体は、どこにあるかわからないし、その情報は別に言わなかったのね。だけど飯川君が感動したポイントの周りにあるものが写されていました。

**飯川** これは、卒業制作の頃から取り組んでいた《時の演習用時計》というなんでもない景色を撮影したり、何か起こりそうな景色を24時間撮って、デジタル表記や、秒針とかを使わない時計の映像を作るプロジェクトです (pp.44-45)。映像作品ってフォーマットがあって、当時は見せる場所も限られているから、自分の映像を作ってもすぐに見せることができないというジレンマに陥って

ましたね。映像祭とかで3時間とか5時間拘束されるよりも、日常のお父さん、お母さん、パートナー、友達みんなに、自分の映像作品に触れる状態を自分で作って、止まることのない、いつもそれぞれの時間で再生されている映像作品っていうのができないかと思いました。時計という日常に使うプロダクトと自分のビデオ作品の時間をテーマに結びつけたものです。美術作品って展覧会が終了したら倉庫に保管されて見てもらえないけど、時計なら壊れる日まで毎日いろんな人の側でアプローチし続けられると思いました。

**小川** そういう活動を見たから、飯川君は、時間が流れていたとしても、それは一つの時間ではなくて、それぞれにそれぞれの時間が流れていることを可視化するような、相対的な視点を持っている作家だなと思いました。サッカーのゴールキー



*The Clock for Practice of Time -Univer Dome-*  
2006  
Video, 24 Hours

パーや控え選手だけを撮影したシリーズは、サッカーボールの周りだけ時間は流れているように見えて、だけど、ボールが無いところにもそれぞれの場所に時間が流れていて、それぞれの視点があることを作品にしている人だと。《デコレータークラブ》も、フォーカスを当てる題材ではないところへ視点をずらし、フォーカスする。

**飯川** 2016年に神戸の六甲ミーツアートで最初の大きな猫を作る機会がありました。その後2017年の広島市現代美術館の「どこでも企画公募」で高嶺格賞をもらいました (p.59)。ある場所に大きな猫がいて、観客が写真を撮りたくなるための装置というか、でもどうやっても全貌は撮れないように設計しています。SNSサイトにアップしたいけど、可愛く撮れないし、思ったより写らないとか、実際は蛍光ピンクで可愛いのに変な色

になる(笑)。本当に自分が見た時の迫力は写らなくて、写真を撮ることに意味がないんじゃないか?と自問してしまうような作品です。これを2、3年、福岡、広島、高松でやって、去年、台北と台中でも展示しました。

**小川** この猫も《デコレータークラブ》なの?

**飯川** これもそうですね。まわりの友達からはついに猫作家になったねと言われました(笑)。これは自分の中で一番じっくり来たというか、コンセプトの整理ができた時のプロジェクトで、めちゃくちゃ評判良かったです。実際に観に来た人が、写真に撮れないし、こんなに可愛いのになぜここにあるのかとクレームが来て、イメージ通りの反応でした。とにかく大きなピンクの猫の存在感で、観客の足を止めることにすごく効果があるんです。そこから観客を引き込むと言うか。



**DECORATORCRAB -Impulse and things around-**

2015

40 photographic boxes, 450 cm x 350 cm

Installation view: *DECORATORCRAB*, Shioya Project, Kobe, 2015

photo: Hyogo Mugyuda



**Decoratorcrab - Mr. Kobayashi, the Pink Cat -**

2017

Wood, fluorescent paint, 400 x 540 cm

Installation view: *Open Call for Art Project Ideas 2017*,

Hiroshima City Museum of Contemporary Art

小川 その上手くいった大きな猫の作品と今回の作品の繋がりをもう少し話してよ。

## ■記録できないジレンマ

飯川 デコレータークラブを「擬態する蟹です」って人に見せることはできません。何もないところに現れた「蟹と自分」の特別な状況を写真に撮り伝える。でもその写真からは伝わることなく、ほとんどなく、伝わらない何かがあるっていうのを、観客がこの作品を前にした時に感じてくれたらいいなと思います。

小川 しめしめみたいな……それで、今回も《デコレータークラブ》なんだね。

飯川 今回は、入口とか廊下に壁があり、観客は視覚的な情報で「なに？ 壁!」となって、「入

られへん、動かれへん、どうしたらいいん?」となって、壁と一回対峙してちょっと考えた後に、スタッフの人にサポートしてもらっています。一部だけの情報を見て、自分が押して動くことで、少し地面が見えたり、天井の照明が見えたり、最初に見た情報とアクションして出てきた情報とを合わせて全体を想像してもらおうというのが今回の作品のポイントです。それがなぜ《デコレータークラブ》かと言うと、デコレータークラブも海の情報をずっと背負って、色、形は見えるけど、裏がどうなっているかわからない。背負って全部覆っていると、実際この中に何かあるかもわからないし、この反対側もわからない。人はその一部だけの情報を見て全容を想像する、では、どれくらい全体を想像しているのかというのに僕は興味があります。room1 の茶色の構造物 (pp.12-13) は、人の



Archival video footage of *Very Heavy Bag 10 kg*  
2010  
bag, stone, video camera, Real-time recording

想像を誘発する、デコレータークラブが背負っている物のようなイメージです。

**小川** デコレータークラブが背負っている物？

**飯川** デコレータークラブの全体を想像するとうか。断面をいくつか見ることで、人は構造物や、この建物全体を想像する。それが、僕のイメージする《デコレータークラブ》に繋がっている。今回の展覧会も大きなピンクの猫の全貌が見えないプロジェクトから派生していて、写真に撮ろうとす

ると、近くでは写らないし、緑色の壁（pp.18-19）も全体を撮ることはできない。その空間に対して作っているから撮れないのです。猫の作品の持っている仕組みっていうのも今回の展示に組み込まれていて、A-Labの松長さんに、「猫と、今までの周縁を撮るものが合わさったような作品ですね」って言ってもらったことがあって、自分でも最近、説明できるようになったんです。これは全貌が撮れない、なぜ全貌が撮れないことが面白い



かっていうのは、手に負えないとか、記録できないジレンマとかっていうのが、この空間にはあるからです。観客で「これ面白い展示やから紹介したいけど、写真に撮れへんし、映像にはできへん！」ということを書いてくれた人がいて、まさにそれは自分の狙ったところでした。

**小川** 観客が、作品に関わることや動かしていくのは、強烈な体験として残るけれど、それはどう考えるの。

**飯川** 観客は、壁について、動くと思っていない段階・動くと思った段階・実際動かして色々見えてきた段階を経ることで、情報が増えて全体を想像することができる。一つだと思っていた事柄が段階を経て立ち現れて来る事象だとわかるんです。

**小川** 押すことによって空間を理解していくってことなのかな。

**飯川** はい。今回の作品と今までやってきたので近いのは、鞆の作品です。

**小川** 石の入った鞆。持つことで理解していく。

**飯川** 持つ前は皆「なんでここにスタッフの鞆置いてあるの」って、でも、ビデオを見た時に、「あっ、これ作品？ 重いらしい」って。

**小川** 作品ですよ！ 鞆が。たぶん、ただの鞆だと思っている人もいると思うけど、砂が入っているんですよ。30キロ近くも。

**飯川** 持とうとする前に自分がイメージする重さと、実際持った時の重さにズレができるのです。体感で言うと、身体的な重さだけど、この箱は、重さと視覚情報のポイントが何個もあって、空間を想像する。それは、時間の概念とかと一緒に、「今何分たった？」って訊かれても、例えば最初の基準となる時間を聞いていなかったり、





DECORATORCRAB -Impulse and things around-  
2016-2019  
Video, 18 mins



見ていなかったら、今何分たったかという概念などない。その時間も、重さも、見た目の距離感も、比較して想像できるって言う意味では一緒です。

小川 なるほど、よくわかってきた (笑)。

## 作品自体も相対化できる

飯川 今回の展示は、人が得られる感覚のポイントを、重さと、距離、実際歩いて裏側に周って見

るとか、自分の体を使って感じて想像してもらいたいです。

小川 今回の作品で僕が思うのは、異化作用みたいなことなかなって。この壁ってというか、この立体があることで、なんの変哲も無い空間が特別な空間に変わってしまう。そういうことかなと……。ただ作品の感じ方とか、読み解き方は、作家の言っていることが全てじゃないし、もちろん僕が言っていることも正解ではない。「作品のコン



本展の空間全体をあらわした模型。

セプトは、こういう風になっています」っていうのは僕は嫌いで。美術館とかは、「こういうものですよ」っていう説明まで持っていかないとだめなんだろうけど。飯川君の作品がなんでいいかというのは、いろんな見方ができて、その余地があるというか、こういう作品ですよというだけじゃないからいいなって。

**飯川** 展覧会を仕掛けることって、いろんな状況があるから、理屈がないと実際色んな部分が動かない時もあるって、仕事でアートをやるとケースによって強引に言葉を作る時もあります。

**小川** でも、視点をちょっとずらすと違う見方ができること自体が、飯川君の作品。相対的に物事を見せる時に、相対的に世界が成り立っていることをやりつつ、作品自体も相対化できるのが魅力の一つかなとも思います。さてさて、ようやくたどり

着きそうだけど、これからどうしようかっていう話。今日来ていただいた人は《デコレータークラブ》のことわかったと思う。正直、この展示成功では？ いい展示だと思う！

**飯川** 個展の機会とか、建築と出会いがあれば、またチャレンジしたいです。

**小川** 一つだけ文句言うなら、模型はいらないな。

**飯川** 模型は、作品ではなく、一応全部見た後にすべてを体感して、壁が行き止まりの状態を考え、押してみても考え、空間が現れたあと、この建物はどうなっているのだろうと全体を考える事ができた時点で作品は終わっていて、モヤモヤして帰ってもらうのも作品。でも、モヤモヤの後に、模型を見て整理するっていうのは、考えるポイントが一つ増えることになる。

**小川** スタッフさんが廊下にいるのは、危険防止



小川さんとのトークの様子。

のためだとわかったけど、「これ面白いでしょ？」っていうのを言いたくて廊下に出て来ているんだと思ってた。

**飯川** 人のオペレーションで見方が変わってしまう。ほんとは無人で、期待してない展覧会に来て、壁があって押して「うわっ!？」となるのが理想です。これは、建物、公民館とスタッフも含めて作品になっている。

**小川** なるほど。だから「ここ押してもいいんですよ」って。

**飯川** 入口がわからなくて怒ってしまう人や帰ろうとする人もいましたが、そこは状況を見て声を掛けていました。

**小川** 今後は、これをどう展開していくの？ もう少しやるんでしょう？

**飯川** やります。できる場所を探しています。こ

の構造物と建築物の展開と初期の写真やビデオ作品もあって、猫もあって、どこかに興味を持ってもらえたら《デコレータークラブ》の全貌を知ってもらえる。やりたいことはたくさんあります。2013年に Ongoing にレジデンスをした時に、小川さんが「とにかくいろんな場所でやって、話を聞いてもらって《デコレータークラブ》の考え方を知らせてもらってからが勝負だよ!」と言ったんですよ。

**小川** 言ってたかなあ (笑)。